

遠方の語り部との交流（実演編）：本会場を場とした神戸（日本）とパル（インドネシア）の語り部の遠隔地講演

佐々木俊介^{1, 2}・河田慈人²

¹早稲田大学アジア太平洋研究センター

²人と防災未来センター

1. はじめに

本発表は、本予稿集の「遠方の語り部との交流（方法編）：本会場を場とした神戸（日本）とパル（インドネシア）の語り部の遠隔地講演」の実演編である。そのため、本研究の背景等については、方法論の方に詳細を示し、本稿においては以下に概説することと定める。

被災経験や被災から得られる知識の伝達や継承において、語り部の方々が果たす役割は大きく、各地の災害ミュージアムにおいて活躍している。このような例として、阪神淡路大震災に関する展示を主体とした「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター」（人と防災未来センター公式ウェブ・サイト）や東日本大震災に関する展示を主体とした「気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館」（気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館公式ウェブ・サイト）などがあり、語り部の方々が伝承者として活躍されている。

近年、映像および通信技術が劇的に進歩し、語り部の方々の活動の場をより発展させることができる環境が整いつつある。高性能なカメラが付いたスマート・フォンやビデオ電話が可能なアプリケーションの普及など、語り部の方々が、遠方の災害ミュージアムにおいても講演することが可能な環境を比較的低価格で整備することが可能になってきている。

そこで本発表においては、本大会の会場（高松市）を講演会場として、人と防災未来センターの語り部（神戸市）およびパルの避難所の滞在者（インドネシア共和国）による講演会の開催を試みる。本発表は口頭発表（方法編）とポスター発表（実演編）からなる。口頭発表（方法編）では、交流方法の検討過程についての発表を行う。ポスター発表ではポスターに設置した機器を用いて、日

本とインドネシアの語り部の方々に講演して頂くとともに、学会参加者との質疑応答を行って頂く。

2. 交流方法

本発表では、本大会の会場（高松市）と人と防災未来センター（神戸市）、本会場とパルの避難所（インドネシア共和国）のそれぞれを、ビデオ電話を用いてコミュニケーションが可能な状態にする。表1は本発表で使用する機器等の一覧である。本発表では、表1に示した機器を、図1に示したように組み合わせて、講演および質疑応答を行う。使用する機器類は、使用する場所によって異なるため、表1では、それぞれに分けて示した。

a) 機器

使用する機器は、Surface Go[®]およびOPPO A5s[®]である。学会会場においてはSurface Go[®]（図1-A）を2台使用する。語り部の方にはそれぞれOPPO A5s[®]（図1-B）の使用を依頼する。これらの機器はタブレットとスマート・フォンでありカメラと通信機能を使用することが可能である。

b) アプリケーション

使用するアプリケーションは、LINE[®]とWhatsApp[®]である。日本において最も一般的なメッセンジャー・アプリケーションはLINE[®]であるため、人と防災未来センターの語り部の方には、LINE[®]の使用を依頼する。次に、インドネシアにおいて最も一般的なメッセンジャー・アプリケーションはWhatsApp[®]であるため、パルの避難所の方にはWhatsApp[®]の使用を依頼する。学会の会場では、通信する相手が人と防災未来センターの語り部の方々の場合LINE[®]を用い、パルの避難所の方々の場合WhatsApp[®]を用いる。

表1 使用する機器等

使用する機器等	学会会場	人と防災未来センター	パルの避難所
機器	Surface Go	OPPO A5s	OPPO A5s
アプリケーション	LINE、WhatsApp	LINE	WhatsApp
通信回線	会場Wifi	Docomo	Telkomsel
通訳	必要	不要	必要



図 1 本発表で使用する機器等

c) 通信回線

使用する通信回線は、会場の Wifi、Docomo[®]、Telkomsel[®]である。本発表で使用する Surface Go[®]は Sim フリー・モデルであり、Sim カードを用いることで通信が可能であるが、通信の安定性や、様々な通信回線を試すために、会場の Wifi を使用する（会場 Wifi が使用できない場合 4G 回線を使用する）。人と防災未来センターの語り部の方には Docomo[®]回線を、パルの避難所の方には Telkomsel[®]回線を使用して頂く。

d) 通訳

パルの避難所の方とのコミュニケーションにおいては、発表者が通訳（日本語・インドネシア語）を行う。学会の参加者は基本的に日本語話者であると想定され、人と防災未来センターの語り部の方々も日本語話者であるため、学会会場と人と防災未来センターの語り部の方々とのコミュニケーションにおいて通訳の必要はないと考えられる。それに対して、パルの避難所の方々は公用語であるインドネシア語あるいは地方言語の話者であり、通訳が必要となる。発表者である佐々木はインドネシア語の会話が可能であり、かつ、パルの住民は基本的に公用語であるインドネシア語の会話が可能であるため、佐々木が日本語とインドネシア語の通訳を行う。

3. おわりに

今後の研究においては、語り部の皆様に何を提供することができるのかについて検討する必要があると考えている。語り部の方と研究者との交流は、研究者にとってのメリットは大きいと考えている。しかしながら、現状において、語り部の方にとってメリットになるものを明確には提示できていない。そのため、今後、「ビデオ電話による遠隔地講演」（本発表内容）、「語り部さんのネット

ワーク化」（今後の課題：方法編の予稿参照）、「語りのアーカイブ化と公開方法の検討」（今後の課題：方法編の予稿参照）において、語り部の皆様の視点に立った研究が必要となると考えている。

今後の研究では、まず、語り部の方々の思いに関する調査を行いたいと考えている。協力していただく方々の思いやメリットを考慮することは、円滑で持続的な関係を構築する上での基礎になるといえる。そのため、少なくとも、語り部の方々が研究者との交流にどのようなことを期待し、何をメリットと考えるのかについて把握する必要があると考えている。その上で、語り部の方々の自己実現を含め、語り部の方々が語り部として何を実現したく、そのためには、研究者との交流や語り部の方々のネットワーク化をどのような形にすべきかを検討していく必要があると考えている。

謝辞：本発表は様々な方のご協力により実現することができており、関係者の皆様に感謝申し上げます。とりわけ、人と防災未来センターの語り部の方々、および、パルの避難所の方々からの多大なご協力を頂いていることに感謝申し上げます。加えて、研究結果の発表の場である大会において、調査と即興の結果発表を行うという通常とは異なる発表形態を認めてくださった災害情報学会、とりわけ第 21 回大会組織委員会の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館公式ウェブ・サイト（参照年月日：2019.08.27）, <http://www.kesenuma-memorial.jp/>
 人と防災未来センター公式ウェブ・サイト（参照年月日：2019.08.27）, <http://www.dri.ne.jp/>